

# 神の備えられた道

ジョーンズボロ アーカンソー州 アメリカ合衆国

1953年05月13日

1 「ありがとう、リード兄弟。皆さん、こんばんは。今夜こうして主のご奉仕の中において、皆さんと共に会えることを心から嬉しく思います。主の御業を行うためにここに立てること——それ自体が私にとって大きな恵みです。

どうか今夜のこの集いが、多くの方々に祝福となりますようにと心から祈ります。そして私たち自身もまた、この場所に共にいられることが大きな祝福なのです。そうですね……(笑顔で)私はカメラというものをも意識してしまうんですよ。[ブラナム兄弟と会衆、笑い]

はい、覚えていますよ。これまでの礼拝の中でも、何度も写真が撮られたものですからね……。

主があなたを祝福してくださいますように、兄弟。」

2 「そうなんです。実を言うと、私にとって一番難しいのは、あのカメラのレンズをじっと見つめることなんです。あれを一度見てしまうと、しばらくの間、まるで目がくらんで見えなくなってしまうんです。」[ブラナム兄弟、笑いながら]

[会衆も一緒に笑う]

「しかし本当に、ここに来られることは私にとって大きな特権です。

まるで“ホームカミング”——懐かしい里帰りのように感じますね。

壁ぎわにずらりと並んだ皆さんの姿を見て、心が温かくなります。

外では雨の中にも関わらず、立っておられる方々もいて……まるでアーカンソー州にいる時のようです。」

「今回はあまり集会の宣伝をしませんでした。

というのも、ほんの数日間、静かな時間の中で少し教えたり、御言葉を語ったりしながら、心を整える時にしたかったのです。

もし主がもう少し時を与えてくださるなら、またすぐにでも皆さんのもとに戻って来たいと願っています。」

3 「これから私は家に帰って、アフリカやインド、パレスチナ、ドイツ——そして他の多くの海外の地へ行く準備を始めます。私たちの主は、つい最近アフリカで実に驚くべき集会を与えてくださいました。なんと一日で三万人がキリストに立ち返ったのです——そう、一日で三万人ですよ。神の栄光が天から下るのを見た時、人々は震えました。宣教師たちは長い間、彼らに主について語ってきました。そして今、その主ご自身が臨在され、彼らが聞いてきたとおりの御業を目の前でなされたのです。私は招きをしました——すると三万人もの、今まで福音を知らなかった人々が、一度にイエス・キリストのもとにやって来たのです。

私たちはその後、三、四回ほど集会を持ち、全体では十万人ほどが集まりました。けれども、あの一度の招きで三万人が主の御名を受け入れたのです。

今、私は再びその同じ場所に戻る準備をしています。

なぜなら、主が幻(ビジョン)によって、そこに再び導かれると約束してくださったからです。皆さんの中には、「その幻が語ることは本当に成就するのか」と思う方もいるでしょう。では、このことを聖書の余白に書き留めておいてください。以前フィンランドで、小さな少年が死からよみがえると示された幻を覚えておられますね?あのことは『ヴォイス・オブ・ヒーリング』誌にも掲載されましたが、予告されてから二年後に成就したのです。今度の集会は、あの時の三倍の規模になるでしょう。三十万人の人々がその集会に集まると、主が示しておられます。その成就が事実かどうか、あなたがたの目で確かめてください。」

4 「ああ、今度の集会では、主は前回以上に大いなる祝福を注いでくださるでしょう。このことも、どうかここに書き留めておいてください。そして時が来たとき、それが真実であったことをご覧になるでしょう。どこで起こるのか、私はまだ知りません。しかし、私はひとつの幻を見ました——

ひとりの小さな赤ん坊がいました。頭の前のほうに、白い髪の手が少し生えているのです。おそらく八か月か十か月ほどの赤ん坊でしょう。私は年齢を見分けるのがあまり得意ではありませんが、その赤ん坊は命を落とすことになります。

喉か胸のあたりに命を奪う何かがあるのです。

その子は緑色の布の担架に乗せられて、葬儀屋の車に運ばれていくのが見えました。その時、私はその場を通りかかり、主がくださった幻を悟るでしょう。

そして、神がその赤ん坊に命をお返しになるのです。その子は再び家に戻り、完全に癒される——そう主が示してくださいました。これもまた、必ず成就することを見てください。それからもう一つの幻を見ました。赤い髪の小さな男の子がいます。その母親は頭にスカーフ——女性が頭に巻くあの布——をしています。

彼女は背が高く、やせた女性です。その子はこのくらいの背丈で、ポリオを患い、ひどく足が不自由になっています。けれどもその子は、一瞬のうちに完全に癒されるのです。その光景を見たとき、私はすぐに分かるでしょう——

ああ、あの幻の子だ、と。皆さんも見てください。その時、これらのことがすべて成就するのを、あなたがたの目で確かめることになるでしょう。」

5 「今夜も、私たちの主はここにおられます。多くの方々が、もう長い間ずっと立っておられることでしょう。そのことを思うと、本当に申し訳なく、またお気の毒に感じます。いつかのことですが、野外で奉仕をしている兄弟の中には、私よりも経済的に恵まれていて、大きなテントを持っている方々がいました。そのうちの何人かは、今ではもうそのテントを使っていないのです。ですから、何人もの兄弟たちが私に連絡をくれて、『そのテントを使いたければ、自由に使っていいよ』とってくれました。中には、一万五千人も収容できるほどの大きなものもあります。私はリード兄弟とも話したのですが、ジョーンズボロのすぐ外あたりにそのテントを張って、一か月ほど滞在し、古き良き時代のようなリバイバル集会を開きたいと思っています。そして、その地域のあらゆる教会の方々に協力していただけたらと願っています。どの教派であっても関係ありません——主を共にあがめることができるなら、皆歓迎です。もちろん、中には協力しない方々もいるでしょう。そして、神の癒しを信じない人たちもいます。そういう人たちは、まだ神の御手に一度も触れられたことがないのです。だから、信じようとしても信じる力がない——そこに“信じる命”がないのです。命がなければ、信仰も生まれません。ただそれだけのことです。ですから、そういう人たちと議論をする必要はありません。聖書にも『彼らをそのままにしておきなさい』と書かれています。

このような人々は、カインの時代からずっと存在してきました。時代を越えてずっと続き、今ではその“つる”が種を結ぶ時代にまで来ています。今日の時代もまた、非常に宗教的で、形式的には正統に見えます。しかし、その中には本質的に“信じない者たち”がいるのです。彼らは、聖書が言うように、“この世に生まれる前から、不信仰に定められた者たち”です。ですから、それが存在するのは当然のことなのです。けれども——『死体のあるところには、はげ鷹が集まる』と聖書は言っています。すなわち、神が働かれるところには、人々が自然と集まり、神を礼拝するのです。それはいつの時代も同じでした。」

6 「今夜、改めて心から感謝を申し上げたいと思います。

リード兄弟、そしてリード姉妹、この教会の役員の方々、そしてすべての会員の皆さん——この期間中、本当に素晴らしいご協力をいただき、心からありがとうございます。今回、私たちの小さなチームはそれぞれ別々の場所に散って休息を取っています。シャリット兄弟はアリゾナ州フェニックスにいます。

ボズワース兄弟は南アフリカのダーバンで、次の集会の準備を進めています。

そしてバロン・フォン・ブロンベルク王はインドで晩餐会の準備をしてくれています。私はインドの首相、ネルー氏との晩餐に招かれています。その後、彼はヨルダンの国王のもとを訪れ、そこでまた小さな晩餐を持つ予定です。それから私たちは、イスラム教徒の地域を経てイスラエルに入り、さらにルクセンブルク、そしてドイツへと進みます。また、私たちの伝道チームの説教者であるバクスター兄弟は、今ブリティッシュ・コロンビアにおります。」

7 「次に予定されている集会は、インディアナ州コナーズビルで行われます。

会場にはおよそ二万人が収容できる予定です。すでにその集会の準備は整っており、地域内の四十三のフルゴスペル教会が協力してくださっています。さらにオハイオ州トレド方面からも、多くの教会や信徒

たちが参加して下さる見込みです。この月の三十一日から、コナーズビルで大きな聖霊集会——福音の宣べ伝えと病の癒しの祈り——が始まります。多くの方々が集まり、主の御業が現されることを心から期待しています。ですから、もしあなたがその地域の近くにおられるなら、ぜひお越しください。私たちはあなたを心から歓迎します。」

8 「もしこのリバイバルの間にイエス・キリストを受け入れた方がいて、まだどの教会にも所属していないなら——私はぜひ、この小さな教会に加わることをお勧めします。ここは主に仕えるにふさわしい、あたたかく素晴らしい場所です。

もし私がこの町の近くに住んでいたら、間違いなくこの教会の一員になっていたでしょう。実際のところ、私はすでにこの教会の仲間です。副牧師としてこの教会に仕えていますからね。ですから、時々こうして戻ってきて、自分の教会の様子を見に来るのです。ええ、また主が許して下されば、そう遠くないうちにまた皆さんにお会いしに戻ってきます。そして他の町におられる方々も——ご自分の教会にできる限り通ってください。礼拝がある日には毎回出席し、忠実でいてください。自分の教会を支え、牧師を支え、ありったけの力で助けてください。

霊的な励ましを与え、断食し、祈りをもって支えてください。牧師を信頼し、信仰を持ち続けるなら、神がその教会を導き、やがて私たちが待ち望むあの栄光の時へと進ませてくださいます。たとえ誰かがこう言ったとしても——『うちの教会はそんなこと信じていませんよ』と。それでも構いません。大切なのは、あなたが信仰の基本をしっかりと信じ、神の霊によって新しく生まれた者であることです。キリストが白い馬に乗って来られると信じる人もいれば、白い雲に乗って来られると信じる人もいます。けれども、そんな違いは関係ありません。

主は必ず来られます。だから、ただ主を信じ続けてください。そうすれば、主は確かにここにおられるのです。そして最後に——皆さんすべてに感謝します。

リード兄弟から、皆さんが私のために愛の献金をして下さったと伺いました。

それに加えて、今夜は宣教師献金までお捧げくださったとのこと。

心から感謝いたします。」

9 「お金の使い道についてお話ししますね。私が大きなテントを所有していない理由、また立派な施設を持っていない理由——それは単純なことです。私はいただいたお金の一銭一銭を、主の前に正しく用いるようにしています。神が私の誠実な証人であられることを、私はよく知っています。生活に必要な最低限を除いて、残りはすべて外国伝道のために捧げています。異教の地へ赴き、そこに住む人々に福音を宣べ伝えるためです。そして、ここで皆さんが見ておられるのと同じような働きを、あの地でも行うのです。やがてその日が来たとき——私は、神が任せてくださった務めを忠実に果たした「良き管理者」として数えられたいのです。ですから、私は自らその地へ行き、働きを行います。けれども、その報いは私ひとりのものではありません。なぜなら、私が行くことができるのは、皆さんが送って下さるからです。皆さんの祈りと支援がなければ、私は行くことができません。——そのとおりです。神が皆さんの心に与えてくださった思い——

その捧げもののすべてを、私は主の御名のもとに、できるかぎりの知恵を尽くして、イエス・キリストの福音のために用います。」

10 「私は祈ります——あの日、天の御国で聖徒たちに冠が授けられるその時、

ジョーンズボロの皆さんが次々と前に進み出るのを、少し後ろの方から見つめていたいです。その時、きっと私は感極まって大声を上げてしまうでしょう。

主が一人ひとりの頭に冠を置かれるのを見たら……もう黙ってはいられないと思います。そして私は思うのです——あの栄光の国で、最後の晩餐の食卓が整えられる時のことを。すべての戦いを終え、勝利した者たちが、互いに向かい合って座るその時。年老いた聖徒たちが、戦いの傷跡をその身に残しながら、喜びの涙を流しているのを見るでしょう。私たちは思わず、食卓の向こうから手を伸ばして、互いの手を握りしめるに違いありません。そして私は言うでしょう——

『ああ、兄弟、あなたにまた会えて本当に嬉しい!』と。その長く続く晩餐の食卓を想像してみてください。やがて、王なるイエスが美しい衣をまとって現れ、

私たちの目からすべての涙を拭い取ってください。そしてこう言われるのです——『もう泣かなくてよい。みんなここにいる。すべては終わった。最後の祈祷会も終わりだ。もう断食も祈りもいらぬ。おかえり。今こそ主の喜びに入りなさい。』——ああ、私はその御声を聞きたいのです。それこそが、私が日夜働いている理由です。その瞬間のために、私は全ての力を尽くしているのです。」

11 「では、主があなたを祝福してくださいませ。また、できるだけ早く皆さんのもとへ戻って来たいと願っています。私の家の扉の掛け紐(ラッチストリング)は外側に垂れていますから、いつでも通りがかりに立ち寄ってください。

『ブラナム兄弟、お元気ですか?』——そう声をかけてください。

たいてい人がたくさん集まっていますが、どうぞ気にせずに入ってきてください。そしてこう言ってください——『私はアーカンソーから来ましたよ』と。」

12 「それでは、少し聖書を読みましょう。

およそ十分ほど、御言葉から短くお話をしてから、祈りの列を呼びたいと思います。

どのように進めるか、まだはっきりとは分かりませんが——主が許してくださるなら、試みてみましょう。

(もし少し暑く感じる方は、どうぞエアコンを少しの間入れてくださいね。大丈夫ですよ。)

さて、聖書のヨハネによる福音書3章から読みたいと思います。

手短にお話して、すぐに祈りの時に入ります。

では、3章の9節からです。

ニコデモは答えて言った、「どうして、そんなことがあり得ましょうか。」

イエスは答えて言われた、「あなたはイスラエルの教師でありながら、これらのことが分からないのですか。」

よくよくあなたに言うておく。

わたしたちは自分の知っていることを語り、自分の見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証を受け入れない。

もし地上のことを話しても信じないなら、どうして天上のことを話した時に信じるでしょうか。

天に上った者は一人もいません。ただ、天から下ってきた者——すなわち天におられる人の子だけです。

そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。」

13 「もし今夜の短いメッセージに題をつけるなら——そうですね、“テキスト”として言うなら、私はこの一週間、『イエスとはどなたであったのか』というテーマで語ってきました。イエス様はどのような御働きをなさったのか? 当時の人々はイエス様をどう見たのか? どのように受け入れたのか?

そして——そのイエス様の働きは、今日とどのように関わっているのか?

『昨日も今日も、そしてとこしえに変わらない』という御言葉(ヘブル13章8節)を土台に、今の時代と比較して見ていこうとしてきたのです。今夜の主題はこうです——『神が備えられた道(God's Provided Way)』。私たちはよくこう考えます——もし本当にイエス様を探すとしたら、どんな方を探せばよいのだろう? と。主は『世の終わりまで、あなたがたと共にいる』と約束されました。

ですから、たとえ私たちの信仰が弱る時があっても、主ご自身は今もここにおられるのです。私たちの信仰が揺らいでも、主は誠実なお方です。

主はご自分を否むことはなさいませぬ。——そうです。主は、今もここにおられるのです。」

14 「私が思うに、皆さん——私たちがつまづくのは、“信仰の欠如”です。

私たちは、主をどこか遠い彼方におられる存在のように考えてしまう。けれども、実際には主は今ここにおられるのです。今夜この部屋の中で、主はこの光と同じくらい現実におられます。光がある限り、闇はこの部屋に入り込むことができません。外がどれほど暗くても、この光が灯っている限り——闇は光に勝つことはできないのです。その通りでしょう？どんなに闇が窓の外から押し寄せようとしても、光がある限り、光のほうがはるかに強いのです。同じように——信仰が入ってくるなら、どれほど多くの不信仰が周囲にあっても、信仰の光はその闇を打ち破るのです。私は信じます。今夜この場所におられる神は、私の手の上に照らしているこの光と同じくらい——いや、それ以上に現実、確かににおられるのです。」

15 「さて、もし私たちが主イエスの地上での働きを見ていたなら——主はご自身を“偉大な人”とも、“癒し主”とも名乗られませんでした。今日、多くの人が“病のために祈る人々”を非難し、“あれは神がかりの癒し屋(divine healer)だ”などと呼びます。しかし、ある人が“神の癒し”について説教したからといって、その人が“神的な癒し主”になるわけではありません。もしそうなら、“救い”を語る人は“神的な救い主”ということになってしまいます。どうですか？牧師を指さして「見てごらん、あそこを通っているのが私の“神的な救い主”だ」なんて言うのは、正しいでしょうか？——もちろん、そんなことはありません。同じように、“神の癒し”を語る人を“神的な癒し主”と呼ぶのも、聖書的ではありません。

癒しを説く人が癒すのではない。それは、救いを説く人が人を救うのではないのと同じです。牧師はあなたを救うことはできません。できるのは、御言葉を伝え、キリストを指し示すことだけです。そしてキリストご自身も、今、新たにあなたを救うではありません。なぜなら、すでに二千年前に救いの御業は完成しているからです。私たちはそれを“受け取る”だけでよいのです。同じように、人はあなたを癒すことはできません。できるのは、二千年前にあなたのために十字架で癒しを成し遂げられたキリストを指し示すことだけなのです。」

16 「少し前のことですが、ある場所でスチュワート・ハミルトンという人や、何人かの著名な“根本主義派”の伝道者たちに会いました。ここにいらっしゃる皆さんの中にも、その名前を聞いたことのある方がいるかもしれませんが、いろいろな方がおられるので、ここで具体的な名を出すのは控えましょう。その中の一人の牧師が私のところにやって来て、こう言いました。「ブラナム兄弟、人としてはあなたを尊敬しています。しかし、あなたの“神の癒し”に関する教えは間違っています。」私は答えました。「そうですか。では、聖書そのものが間違っているということになりますね。」彼は言いました。「まさか！あなたは“神の癒し”を贖い(atonement)によって説いているのですか？」私は、「はい、そうです」と答えました。彼は続けました。「ブラナム兄弟……」——彼は私が神学教育を受けていないことを知っていたのでしょうか——「もし私が聖書によって、あなたが間違っていることを証明できたら、受け入れますか？」私は言いました。「もちろんです、兄弟。聖書によって私の誤りを示してくれるなら、喜んで受け入れます。私は間違ったままでいたくありませんから。」すると彼は言いました。「では、あなたは“神の癒し”が贖いによるものだと説いているのですね？」「ええ、その通りです。」彼は言いました。「イザヤ書のあの預言の箇所のことですか？」「はい、その通りです。」そして彼はこう言いました——「ブラナム兄弟、もし“神の癒し”が贖いの中にあるのなら、人はもはや痛みを感じることはないはずですよ。」

なぜなら、贖いが完全であるなら、痛みそのものが存在しないはずでしょう。」

私は静かに尋ねました。「兄弟、あなたは魂の救いも贖いの中にあると信じていますか？」「もちろん信じています。」「では、誘惑はどうですか？」彼は一瞬黙りました。(皆さん、ここをよく聞いてください。)そして彼は言いました。

「あなたはそれをイザヤ書に適用しているのですか？」「はい、そうです。」と私は答えました。私は教育を受けた者ではありません。だからこそ、私は聖霊の知恵に全面的に頼っています。主が言われたように——『何を語ろうかと思ひ煩うな。その時、その言葉は与えられる』。私は今までに世界を三度横断しながら伝道してきましたが、主は一度も私を見捨てられたことはありません。

そして、これからも決して見捨てられることはないのです。」

17 「するとその牧師は言いました。『では、ブラナム師よ、ひとつ質問させてください。もし私が聖書によって、イザヤの預言がすでに成就し、もはや終わったものであると証明したら、どうしますか？』彼は続けました。『“彼は私たちの咎のために打ち砕かれ、私たちの不義のために傷つけられた”——そうイザヤは言っていますね。そしてマタイの福音書第8章にはこう書かれています。“夕方になると、人々は病人や悪霊につかれた者を大勢イエスのもとに連れてきた。イエスはみなを癒された。これは預言者イザヤを通して語られた言葉が成就するためであった——『彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った』と。”——ほら、これでわ

かるでしょう、ブラナム兄弟。この時点で預言はすでに成就したんです。聖書自身が“成就した”と言っているじゃありませんか。』私は穏やかに答えました。

『兄弟、それでは、あなたはこう言っていることになりますね。——イザヤの預言、“彼は我らのとがのために傷つけられ、打たれ、彼の打たれた傷によって私たちは癒された”——その“癒し”は、イエスがその時癒された人々によってすでに完全に成就したのだと。そう信じておられるのですか?』『そうです。聖書にそう書かれています。』と彼は答えました。私は言いました。『では、あなたの言う通りなら——贖い(atonement)が“実際に成された後”よりも、“成される前”のほうが力があつたということになりますね。なぜなら、その出来事はイエスが十字架で死なれるより一年半も前のことです。贖いはまだ“成し遂げられて”いなかったのです。それなのに、どうしてそれが贖いの成就だと言えるのでしょうか?』

彼は黙り込み、そして言いました。『それでは……』

18 「『では、こうしましょう、兄弟。こちらからも一つ質問してよろしいですか?』と私は言いました。彼は次第に難しい言葉を使い始めたので、私は笑いながらこう言いました。『おっと、それ以上“未知の言語”を話さないでくださいね。私にはそんな難しい言葉は理解できません(笑)。日常の英語で——キングジェームズ訳の聖書に出てくるような、分かりやすい言葉で話しましょう。そうすればお互いに分かり合えますから。』そして、こう続けました。『では、ひとつだけ確かめたいことがあります。あなたも、“神の癒し”が聖書の中に書かれていること自体は認めますね?——聖書の中に。』私は、彼がその一言を言うのを待っていました。

彼は答えました。『ええ、確かに聖書には書かれています。しかし、贖い(atonement)は“御言葉の上に”あるのです。そこがあなたの間違いですよ、ブラナム兄弟。なぜなら——マルコ11章に書いてあります。(マルコ16章は靈感によるものではないと言う人もいますが)マルコ11章24節にはこうあります——

“何でもあなたがたが祈って求めるものは、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、それが与えられる。”——ほら、何でも、ですよ!』彼は言いました。

『だから確かに聖書には書かれている。でも、それは“贖いの中”には含まれていないんです。』私は言いました。『それでは、こういうことになりますね。神は“御言葉”の中に癒しを置かれたが、“贖い”の中には入れなかった——と。それがあなたの言うことですか?』彼は言いました。『そうです。贖いは御言葉よりも上にあるんです。そこがあなたの誤りなのですよ、ブラナム兄弟。』

19 「それで私は、彼にひとつの“たとえ話”をして聞かせました。『兄弟、昔あるところに大きな王国があり、その王国には偉大な王がいました。その王は自らの国における法律、規則、そして贖い(罪に対する償い)の仕組みを定めていました。

ある時、その国の奴隷のひとりが罪を犯しました。そしてその罪は、“死刑”によってしか償えないほどの重いものでした。王はその奴隷を呼び出し、罪状を読み上げました——判決は“死”です。その奴隷には、もはや死ぬ以外に道はありませんでした。それで王は言いました。『お前を処刑する前に、何か望みはあるか?』

奴隷は答えました。『一杯の水をください。』そこで水が運ばれてきました。

しかしその奴隷は恐怖で体が震え、コップを持つ手が震えて、水をこぼしそうになっていました。すると王は言いました。『よし、わかった。私はお前がその水を飲み終えるまでは、お前の命を奪わないと約束しよう。お前がその水を飲むまでは、絶対に殺さない。』その言葉を聞いた奴隷は——水を地面に投げ捨ててしまいました。』

20 「それで私は彼に言いました。『さて、兄弟、この場合どうしますか?』

もしその王が“名誉ある人”であるなら、自分の言葉に責任を持たなければなりません。たとえ法律がどうであっても、いったん口にした言葉は守らねばならないのです。』すると彼は言いました。『まあ、それは王の“うっかりミス”だったんでしょう、ブラナム兄弟。』私はすぐに答えました。『それなら——あなたは、神がそんな“うっかりミス”をするお方だとでも言うのですか?神が御言葉の中に癒しを入れておきながら、贖いの中には入れ忘れたと?……そんなこと、私には到底信じられません。いいえ、兄弟、そんなことはあり得ません。神は決しておろそかなお方ではありません。』私は続けました。『聖書の中に“癒し”があることを否定することはできません。もし御言葉の中にあるのなら、贖い(atonement)はその御言葉を裏付ける力としてあるのです。なぜなら、神の語られたすべての言葉は、聖霊によって靈感されたものだからです。』彼は言いま

した。

『では、あなたはマルコ16章も靈感によるものだと信じているのですか?』

私は答えました。『ええ、もちろんです。すべて——』彼は食い気味に言いました。『9節以降も全部ですか?』——と、そこで私は静かに彼を見つめました。』

21 「私は答えました。『はい、その通りです。“彼らは蛇をも手に取り、たとえ毒を飲んでも害を受けない”——そう書かれていますね。ええ、私はそれも靈感によって書かれた神の言葉だと信じています。もちろん、私は“試みる”ためにそれを行うとは思いませんが——それでも、あの御言葉は確かに靈感を受けた真実です。』

そして、私は彼にこういう話をしました。『あるところに一人の女性がいました。

彼女には大学に通う息子がいて、その息子は“神学”を学んでいたのです。

“神についてあらゆることを学ぶ”ために、遠くの有名な大学へ行っていました。

その間に、家に残されたお母さんが重い病気にかかりました。肺炎で、医者たちはもう手の施しようがないと言いました。彼女はもう死を待つしかない状態だったのです。そんなとき、近所に住んでいた一人の年配の女性が訪ねてきました。

その人は通りの下にあるフル・ゴスペル・ミッション(聖霊派の教会)に通っていた人でした。その婦人が言いました。「奥さん、あなたの教会の牧師さんは“病のために祈る”ということを知っていますか?」答えました。「いいえ、うちの教会では“神の癒し”なんて信じていません。」』

22 「するとその婦人(フル・ゴスペル・ミッションの信者)は言いました。

『まあ、私たちの教会では“神の癒し”を信じていますよ。もしよければ、うちの牧師をここに呼んであなたのために祈ってもらいましょう。』お母さんは答えました。『そうね……いいわ、お願いするわ。』それで牧師がやって来て、彼女に油を注ぎ、癒しの祈りをささげました。すると——なんと、その婦人は完全に癒されたのです!やがて少し時がたち、大学(いや、私はいつも“神学校”と“墓地(cemetery)”を言い間違えるんですが……まあ、どちらもあまり遠くないものですからね(笑))——その神学校から息子が帰ってきました。』

23 「息子は母の顔を見るなり言いました。『お母さん!ああ、無事でよかった。本当に嬉しいよ!』そして喜び合ったあと、ふと真面目な顔になってこう言いました。『でも、お母さん——ひとつ不思議に思っていたんだ。

あんなに重い病気だったのに、死にそうだと聞いて心配して帰ろうと思っていたら、急に“もうすっかり良くなった”って手紙が届いたんだ。あれはいったいどういうことだったの?』母は優しく笑って言いました。『あら、坊や、わからなかったの?』『ううん、知らなかったよ。』『ほら、あの街の中心にある小さなミッション教会、知ってるでしょう?』『うん、知ってるよ。』『あそこにいるフル・ゴスペルの牧師さんが来てくださって、私に油を注いで祈ってくれたの。そして——主が私を癒してくださったのよ。ハレルヤ!』すると息子は顔をしかめて言いました。『お母さん、そんな馬鹿なことを!あそこにいる人たちは無学な人たちなんだよ。聖書を正しく理解していないんだ。私たちは神学校で学んだんだ、“マルコ16章”は——』(ここでブラナム兄弟は軽く笑いを交えながら、聴衆に向かって語り続けます。)'『——彼は“マルコ16章は靈感によるものではない”と教わっていたんです。』

24 「するとお母さんは言いました。『あの牧師さんが私のために祈ってくださってね、聖書を開いてこう言ったの。“病人に手を置けば、彼らは癒される”——そう書いてあるでしょう?私はその御言葉を信じたの。そして、神様は私を癒してくださったのよ!』すると息子はすぐに反論しました。『お母さん、それは違うよ。マルコ16章の9節以降は“靈感によるものじゃない”んだ!』お母さんはしばらく黙って考えました。やがて顔を上げて言いました。『ああ……主をほめたたえます!主をほめたたえます!』息子は驚いて言いました。『お母さん、どうしたんだい?』

彼女はにっこり笑って言いました。『今、ふと思ったの。もし“靈感のない言葉”でさえ私を癒せるのなら、本当に靈感を受けた御言葉なら、どれほどのことをなさるでしょうね!』——その通りです。もし“靈感がない”と彼らが言う箇所でもさえ人を癒す力があるのなら、靈感を受けた御言葉はどれほどの力を持っているのでしょうか?マルコ11章24節を見なさい——『何でも、祈って求めるものは、すでに受けたと信じなさい。そうすれば与えられる。』またヨハネ14章12節——

『わたしを信じる者は、わたしのしている業をも行う。』

—そう、御言葉はすべて靈感によるものなのです。」

25 「さて—神には、ご自分の民のために備えられた道(the provided way)があります。けれども、多くの人—そう、私たち自身も時に—その道から外れてしまうのです。しかし忘れてはなりません。

神はいつの時代にも、その時その時にふさわしい“備えの道”を持っておられるのです。皆さん、そう信じますか？

イエス様はこう言われました—『モーセが荒野で青銅の蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない。』(ちょうど先ほど朗読した箇所ですね。)今からまもなく、病の方々のために祈りの時を持ちますが、その前にもう一度思い出してください。神は常に“備えの道”をお持ちです。それは自然の中にもあります。世界の秩序にもあります。そしてもちろん—あなたの人生の中にも、神がご自身で設けられた“道”があるのです。」

26 「私は時々、秋の終わりごろにほんの一、二週間ほど山へ籠ることがあります。

静かに一人で祈り、心を整えるためです。

そしてそこに行くと、いつも“自然の中にある神の不思議な摂理”に気づかされます。カナダの北の方—九月頃のことです。そこには、いくつもの小さな湖があります。春になると、南から渡ってきた小さなカモたち(皆さんがこちらで水田などで見かけるあのカモたちです)が、はるばる飛んできて、その湖のほとりに巣を作ります。そして湿地帯に卵を産み、子どもたちがかえります。やがて季節が進み、秋になるころ—小さかったヒナたちはすっかり立派なカモに成長します。湖の上を元気に泳ぎ回りながら、のどかな時間を過ごしています。

しかし、ある朝—冷たい北風が吹き抜け、山の頂に雪がかかる頃になると、空気が変わります。冷たい風が谷間を通り抜けて湖に吹きつけると……「……その中の一羽—“オスのカモ”が動き出します。彼はリーダーです。生まれながらの導き手(born leader)です。彼はスツと湖の真ん中まで泳ぎ出ていき、

首を高く上げて、『グワツ、グワツ、グワツ!』と鳴き始めます。すると—湖にいた他のすべてのカモたちが、一斉にその声のもとに集まってくるのです。」

27 「思い出してください—このカモは、それまで一度もこの湖を離れたことがないのです。この湖で生まれ、この湖で育ちました。それでも、ほかのすべてのカモたちはちゃんと知っています。“あのカモがリーダーだ”と。

“神が彼を導くために立てられた”ということ。するとその小さなリーダーは、

何の羅針盤も持たずに、ただ羽を広げて空へ舞い上がります。そして、まっすぐ—まっすぐに—アーカンソーの稲田のある南の地へ向かって飛んでいくのです。不思議でしょう?『それは本能だよ』と言う人がいます。—そう、“本能(instinct)”です。けれども私はこう言いたいのです。もし神が一羽のカモにさえ、寒さから逃れるための知恵を与えられたのなら、聖霊に導かれる人間には、なおさら確かな導きがあるはずではないでしょうか?ではあなたはどうか、

病や悩み、苦しみや冷たい時期(信仰の冬)から抜け出しますか?

—そう、神が導かれるのです。聖霊は人を導きます。けれども問題は—

カモたちは自分のリーダーを知っているのに、私たちはそうでないことです。

聖霊があなたに何かを語られても、

あなたはすぐに“某博士”や“理屈の先生”の説明に耳を貸して、

その導きを打ち消してしまう。

—そこに問題があるのです。」

28 「たとえば—あなたが新聞やニュースを見ていると、こう言うでしょう。

『明日は晴れ、穏やかな天気になるでしょう』と。けれども、もしあなたが外に出て見てごらん下さい。あの母ブタが、北側の斜面にあった木の枝やトウモロコシの芯をぜんぶ引っ張り出して、南側の斜面に運んで巣を作り始めたら——

その時は、新聞なんて信用しなくていいんです。あのブタの方が、気象解説者よりもずっと天気を知っているんですよ。ええ、間違いありません。それから、ウサギ狩りに行ったときも同じです。もしウサギたちが、草の下の奥深くにもぐり込んで丸くなっていたら——たとえ新聞が何と言おうと、寒波が来るんです。

なぜそんなことが分かるのか?——神が彼らに“本能(instinct)”を与えられたからです。神はその本能によって、彼らを守るように造られたのです。」

29 「ある時のことです。父と私で畑を耕していました。その日はとても穏やかな日で、とうもろこし畑を鋤(す)いていたんです——たしか六月か七月頃、畝を仕上げていた時でした。私は古い馬具を使って二頭の馬を操っていました。

縄の手綱(ロープライン)だったんですよ。皆さんの中にも、縄の手綱で耕したことがある人がいるかもしれませんね。あれは首に食い込んで痛いんです。裸の上半身でやっていたら、首が擦り切れてしまうくらいです。その時、急に馬たちが鼻を鳴らして落ち着かなくなりました。私は言いました。『お父さん、どうしたんだろう? この馬たちの様子を見てください。お父さんの馬も同じですよ。』

父は少し空を見上げてから言いました。『息子よ、嵐が来るぞ。』私は辺りを見回して言いました。『嵐? そんな気配はどこにもありませんよ。』すると父は鋤を止めて、ゆっくりとこちらを見ました。あの時の父の顔を私は一生忘れません。

彼はこう言ったのです——『息子よ、お前にはまだわからないんだ。神はこの馬たちに“本能(instinct)”をお与えになったんだ。この馬たちは、まだはるか遠くの空にある嵐の匂いを嗅ぎ分けているんだよ。』

30 「それから二、三列ほど鋤いたところで、空の端から黒い雲がぐんぐんと立ちのぼってくるのが見えました。急いで馬を納屋へ連れて帰らなければならないほどの大嵐になったんです。——そう、父の言った通りでした。

神は本能(instinct)をお与えになったのです。

危険を察知し、避ける道を見いだすための知恵を。

馬たちは遠くの嵐の匂いを感じ取って、安全な場所に逃れる準備をしていたのです。神はそのように動物たちに“避ける道”を備えられました。

そして、私たちにも同じように、備えの道を与えておられるのです。

けれども——多くの人はその道を受け入れようとしないのです。ある日のことを思い出します。コロラドの山の中で狩りをしていた時のことです。あの場所の美しさと言ったら言葉になりません。私たちはエルク(アメリカ大鹿)を仕留めるために行ったのではなく、ただ静かな時間を神とともに過ごすために山へ入っていました。ある秋の初め、十月ごろのことでした。その日も私は一人、山を歩いていました。すると急に嵐がやってきました。私は文明のある場所から七十マイルも離れた奥地にテントを張っていたのです。激しい雨が降り出したので、私は一本の大きな木の陰に身を寄せました。雨が横なぐりに吹きつけ、やがて風が冷たくなり、空気が凍るようでした。やっと雨がやむと、木々の枝葉には氷が張りついて光っていました。そして——谷の向こうに虹がかかりました。ああ、なんとという光景だったでしょう。“深いところが深いところを呼び求める”——まさにその瞬間でした。胸の奥から何か熱くこみ上げてきて、ただ立ち尽くして、神の御業に感謝せずにはいられませんでした。するとしばらくして、遠くの山の上から灰色のオオカミの遠吠えが聞こえました。それに応えるように、谷の下の方からもう一匹の声が返ってきました。ああ……なんとという響きでしょう!

私の母はハーフインディアンです。だからでしょうか——

その声を聞いた瞬間、血が騒ぐような、魂の奥底から何か“**応答する**”を感じたのです。」

31 「その時、私は思いました。『ああ、神よ……ご覧ください。あの山の向こうに、主の大いなる御目(みめ)が見えます。虹——それは、主の契約(ちぎり)のしるしです。もう二度と水では滅ぼされない、次は火に

よる、と。』

私はまるで黙示録の1章を目の前で見ているようでした。——『御座におられる方、そのお姿は碧玉(へきぎよく)と赤玉(しゃくぎよく)のようであり、

初めてあり終わりである方——かつてあり、今もあり、やがて来られる方——

その御頭の上には虹がかかっていた。』その虹は、御自身の血によって人に与えられた契約のしるしでした。恵みによって、人は救われる——そう語りかけるようでした。ああ、その瞬間、私の内の“深きところ”が何かを求めて叫び始めました。

魂の奥底から、神に向かって呼びかける何か湧き上がってきたのです。

その時、ふと横で音がしました。ガサガサと音を立てて、何かが動いているのです。見ると、小さな**松リス(pine jack)**がいました。松ぼっくりを食べる、あの落ち着きのない小さなリスです。ああ、なんて騒がしいやつでしょう! まるで“おしゃべりフクロウ”みたいに、鳴いては毛を逆立てていました。私はその小さな生き物を見ながら思いました。『いったい何をそんなに怒っているんだろう? もしかして私を怖がっているのか?』と、その時——少し離れた倒木の下から、何かが動くのが見えました。何年も前に嵐で倒れた大木の陰から、一羽の大きなワシがゆっくりと姿を現したのです。見たことがありますか? 頭の白い、堂々とした白頭鷲(はくとうわし)——なんと美しい生き物でしょう! そのワシが翼を広げて出てくると、あの小さなリスは、「チツチツ! チツチツ!」と声を上げて、

その大きな鳥に向かって鳴き立てていたのです。」

32 「私はそのワシがゆっくりと出てくるのを見ました。そして倒木の上に堂々と腰を下ろしたのです。ああ、なんという威厳でしょう——その勇ましさに息を呑みました。ワシはあの小さなリスの方をちらりと見て、それから今度は私の方を見ました。鋭く光る灰色がかかった大きな瞳——その目がキラリと閃いた時、私は思わず心の中でつぶやきました。『主よ……これはどういう意味なのですか?』

なぜこの時、このワシを私の前にお見せになったのですか?』私は信じています。——神を愛する者には、すべてのことが益となる。

すべての出来事には意味がある。今夜ここにいるあなたも、偶然ここにいるのではありません。神があなたをここに導かれたのです。私はそこで涙を流しながら立ち尽くしていました。胸の中が熱くなり、心が燃えるようでした。『主よ、なぜ私はここで泣いているのでしょうか?』そう思った次の瞬間、私はもう抑えきれませんでした。木のまわりをぐるぐると走りながら、大声で叫び、手を振り上げ、飛び跳ねて——まるで狂ったように「ハレルヤ! ハレルヤ!」と叫んでいました。もしあの時の私を見た人がいたら、きっと“熱狂的な変わり者”だと思ったことでしょう。けれども、そこには誰もいませんでした。ただ、主だけが私の賛美を聞いてくださっていたのです。私は銃を地面に置き、再び木のまわりを走り出しました。『ハレルヤ! ハレルヤ!』——何度も、何度も。その時、あのワシがじっとこちらを見ていました。きっと彼の目には、私は“妙な種類の生き物”に見えたのでしょうかね。」

33 「私はそのワシに向かって言いました。『おい、お前、私が怖いのか?』

けれども、彼はただじっと私を見つめているだけでした。動じる様子など、まったくありません。その時、ふと心の中で何かが“ピン”とききました。

——ああ、そうか! 主よ、あなたはこのワシを通して私に“**勇気**”を教えようとしておられるのですね。そうです。神は臆病な者をお望みにならない。

神が求めておられるのは、勇敢な者です。神はあなたにこう言われているのです。“この教会の中では癒されたと言いながら、外に出て、不信仰な人に出会った時には口をつぐむのか?” あの人があなただけを“狂信者(ファナティック)”と呼ぶかもしれません。でも実際には——どちらが本当の狂信者か、立場が逆なのです。

神の癒しを信じているあなたが、その恵みを人に語ることを恐れるなら、

どうして神があなただけを用いることができるでしょう? 職場で、あるいは友人の前で、『私はイエス・キリストの救いと、聖霊のバプテスマを受けた』と証しすることを恐れていませんか?——神は、そんな臆病な者を

お望みではありません。

いいえ、はっきり言います。神は勇敢な信仰の人を求めておられるのです。

私はワシを見つめながら思いました。『なんと勇ましいのだろう！ どうしてこんなに恐れがないのだろうか？』もしかして……と思い、私は試しに銃を持ち上げてみました。それでもワシは少しも動かず、ただその大きな目をパチリと瞬かせて、静かに私を見つめていました。——ああ、やはり彼は私を恐れてなどいない。』

34 「私は不思議に思いました。『どうしてお前は怖がらないんだ？ 私が撃とうと思えば、お前を撃てるんだぞ？』——もちろん、実際に撃つつもりなどありません。私は彼をあまりにも美しいと思って、ただ見惚れていたのです。それでも、私は心の中でつぶやきました。『それでも撃とうと思えば、撃てるのに……どうしてそんなに平気でいられるんだ？』その時、私は気づきました。

彼は時おり、あの大きな翼をゆったりと広げて風を感じていたのです。まるで、自分に与えられた力を確かめるように。——ああ、そうか。わかったぞ。

だからお前は恐れないのだ。神があなたに二枚の翼を与えてくださったからだ。

いざという時、それでどこへでも飛び立つことができる。あなたはそれを知っているし、信じている。そして、その翼を感じる限り、どんな危険が来ても、決して恐れない。たとえ私がどんなに素早く銃を構えたとしても、あなたは一瞬で茂みの向こうに飛び去り、私の目から消えてしまうだろう。——そうだ。

その翼を信じているからこそ、あなたは恐れないのだ。翼の力を“感じている”限り、あなたは安全なのだ。」

35 「私は思いました。『ああ、主よ！ そうです——まさにその通りです！』

聖霊の臨在を感じるかぎり、私は恐れない。悪魔が何を言おうと関係ありません。確かに“そこに”おられる——そう信じるだけで十分なのです。

しばらくの間、私はそのワシをじっと見つめていました。やがて彼は、小さな松リスの鳴き声にうんざりしたのでしょう。一度だけ、ぐっと身を沈めて力強く跳び上がりました。翼を二度ほど大きく羽ばたかせたあと——もうそれ以上、羽を動かすことはありませんでした。彼はただ翼を広げて、風をとらえたのです。

無駄に右へ左へ走り回ることもなく、空気の流れをよく知っているその翼で、

ふわりと上昇気流に乗りました。風が彼を持ち上げるたびに、彼はさらに高く——さらに高く——空へと昇っていきました。私は両手を高く掲げ、涙を流しながらその光景を見上げていました。地上では、あの小さなリスがまだ「チツチツ！ チツチツ！」と怒っていましたが——その一方で、ワシはすでに地上を離れ、

風に乗って天へ向かっていたのです。」

36 「私はその瞬間、心の中で叫びました。『ああ、主よ——これこそなのです！』

右へ左へ走り回ったり、あれこれ慌てて動き回ることはない。

ただ、神の力という上昇気流に、翼を正しく広げること——それが信仰なのです。嵐が吹き荒れても、疑いの風が吹いても、その風に乗って、上へ、上へと昇っていく。“地上に縛られた声”——『奇跡の時代なんてもう終わった』『神の癒しなんてあり得ない』——そんな“チツチツ”と鳴く声を後にして、信仰の翼で高く舞い上がるのです。キリストは1900年前に死なれました。けれども——今夜も生きておられます！ハレルヤ！今もご自身の民のただ中におられ、昨日も今日も、そして永遠に同じお方です。その方がここにおられるのです。自然さえ、それを証しているのです。夜、外に出て空を見上げると、私が泊まっている森のあたりに

一羽のナイチンゲール(夜鳴き鶯)がいます。ああ、彼の歌声ときたら——

真っ暗な夜でも、心の底から歌うのです。私はその理由を調べたことがあります。ナイチンゲールは夜の闇の中でただ一つの星を見つけると、歌い出すのだそうです。なぜでしょう？——その星が光っているかぎり、どこかで太陽が必ず照っていることを知っているからです。だから彼は、“太陽が確かに存在する”という確信のもとに、夜の闇の中で賛美を歌うのです。ああ、同じです！もし私がこの世の闇の中で、たった一つでも「アーメン！」という信仰の声を聞けたなら——

私は力いっぱい歌うことができます。なぜなら、イエス・キリストはいまも生きておられる!昨日も今日も、永遠に変わらないお方だからです。光がまだどこかで動いている——そう知っているかぎり、私は賛美をやめません。そして私は星に向かってこう言いたいのです。『小さな星よ、なんて美しく、輝いているんだろう。あなたを見ると、太陽が確かに照っていることがわかる。』」。

37 「もしその星が私に語りかけることができたなら、きっとこう言うでしょう——

『ブラナム兄弟、わたし自身が輝いているのではありません。

太陽がわたしに光を当ててくださっているから、わたしは輝けるのです。』

——そう、それこそ真理です。

昔、ある医者が私に言いました。『ブラナム兄弟、あなたの集会に来るあの人たち、少し神経的に興奮してるだけなんじゃありませんか?』

私は答えました。『いいえ、先生。そうは思いません。』

彼は続けました。『だって皆、騒がしくして、泣いたり叫んだりしてるじゃありませんか。』私は静かに言いました。『それは違います。

あの人たちが自分で輝いているんじゃないんです。

神の光がその人たちに当たって、彼らを輝かせているんです。

それが真実です。』——しばらく前のことです。私は山の中にある小さな泉のほとりに立ち寄りました。昔、よくそこにうつ伏せになって水を飲んだものでした。

その泉はいつもポコポコ、ポコポコと音を立てて、

まるで喜んで跳ねているように見えました。私は思いました。

『おい、小さな泉よ、どうしてそんなに楽しそうなんだい?』

もしかして鹿が君の水を飲むから、嬉しいのかい?』

泉が答えるとしたら、こう言うでしょう——『いいえ、それじゃないよ。』

『じゃあ、熊が君の水を飲むのか?』『いや、それでもないよ。』

『じゃあ、どうしてそんなに弾んでるんだ?』

毎年、私が君のところに来て水を飲むから、嬉しいのか?』

泉はきっとこう答えるでしょう——

『それも違うよ。』」

38 「『いいえ。』——もし泉が話せたなら、こう言ったでしょう。

『ブラナム兄弟、私が自分で湧き上がっているんじゃないありません。

私の背後で“何か”が私を押し上げて、湧き上がらせているんです。』

ああ、そうです。それが“新しく生まれた者”すべてに共通することなのです。

人が聖霊のバプテスマを受けると、その人の内側には“見えない力”が働き始めます。それが、超自然の神を信じさせる力なのです。その人は御霊によって導かれる人となるのです。それは人間自身の力ではありません。——その内側におられる“何か”が押し出しているのです。だから止められないのです。我慢しようとしても、止まらない。その中に“動いておられる方”がいるのです。そう——**神が備えられた道 (God's provided way)**とは、まさにその“内に働く聖霊の力”のことなのです。」

39 「神はノアとその家族を救うために“箱舟”を備えられました。また、かつてエリヤの時代には、イスラエル

の子らのために“十二の石”を整えられました。

——そう、神はいつの時代にも“備えの道(provided way)”をお持ちなのです。

イスラエルの民が荒野を旅していたときも同じでした。やがて罪が入り込み、人々は不平を言い始めました。その時、神はモーセにこう言われたのです。

『青銅の蛇をつくり、それを高く上げよ。』ああ、ここには“信じない者へのしるし”があります。人々が神に逆らい、罪を犯したとき——神はその青銅の蛇を“目印”として与えられました。私たちは詳しく語る時間がありませんが、あの**青銅(brass)**は“神のさばき”を象徴し、**蛇(serpent)**は“すでにさばかれた罪”を象徴していました。その青銅の蛇が上げられたのは、二重の目(compound reason)のためでした。——人々が罪を犯し、病に苦しんでいたからです。彼らは神に赦しを願ひ、その青銅の蛇を見上げたのです。そして——見上げて信じた者は、みな癒されたのです。』

40 「さて——イエス様はこう言われました。

『モーセが荒野で青銅の蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない。』

目的は同じです。意味も同じです。

もし“型(type)”である青銅の蛇を仰いで人々が癒されたのなら、

その**実体(antitype)**であるキリストは、

どれほどの力をもって人を癒し、救うことでしょう！

影がそれほどのことを成すなら——

**現実(real substance)**であるお方は、どれほど完全にそれを成し遂げられるでしょうか！

ああ、アーメン！

なんという真理でしょう！

——ああ、今、私は本当に“聖なる熱”を感じます。

神の臨在がここに 있습니다。

よろしい、主の祝福がありますように。

今夜も神は“備えの道(God's Provided Way)”を

あなたのために開いておられます。

どれほど多くの不信仰者がいても構いません。

彼らは大きな宗教的仕組みを作り、

あちらこちらに“人の教えの水路”を張り巡らせようとするでしょう。

けれども——

雨は確かに降っているのです。

『渇く者はだれでも来て、いのちの水を飲みなさい。』

そうです——

キリストは昨日も、今日も、そして永遠に変わらないお方なのです。』

41 「誰かがこう言うのを聞くことがあります——『ブランナム兄弟は“神の癒し手(divine healer)”なんだろう?』と。けれども、そんなことを言う人こそ精神的に混乱しているんです。その理解はまったく間違っています。人間が“癒し主”になるなどという考えは、聖書に反するのです。もし人を“癒す力を持つ者”として

崇めるなら、その人は悪魔の霊の感化のもとに働いていると言ってよいでしょう。

これは聖書によっても証明できます。——なぜなら、神の言葉に疑問符をつけるのはいつも悪魔だからです。見てごらんください。イエス様がこの地上におられた時、主は“預言者”として働かれました。そう信じますか？イエス様ご自身がこう言われました。『わたしは父が示されることのほか、何も行わない。』ところが当時の宗教家たちはこう言いました。『こっちに来て、この人を癒してみろ。あっちに行って、あの人を癒してみろ。そうすれば信じてやろう。』——それが**同じ古い宗教的悪霊(ecclesiastical devils)**なんです。今も生きています。不信仰な人々の中に、今も、まさにそれが問題なのです。』

42 「見てごらんください。彼らはイエスの顔に布を巻きつけて、頭を殴りつけながらこう言いました。『おい、もしお前が預言者なら、誰が殴ったのか言ってみろ！』

そうしたら信じてやるぞ!』けれども——イエス様はひとこともお答えになりませんでした。主は人を喜ばせるために“見世物”のようなことをされる方ではなかったのです。それでも主は、井戸の女の罪を見抜かれました。

ナタナエルがいちじくの木の下にいた時のことをご存じでした。

また、口に銀貨をくわえた魚の居場所さえ知っておられました。

そして、人々の思いを悟られたのです。——そうでしょうか？

しかし、誰かの見せ物になるために“奇跡をやってみせる”ことは、

主は決してなさらなかったのです。主はただ、父が命じられることだけを行われたのです。そしてついに、彼らはイエスを十字架に打ちつけました。そこへ、当時の“聖なる高名な学者たち”——そう、“傷一つない宗教界の頂点に立つ教師たち”がやってきて、十字架の下でこう言いました。『こうしよう。もしお前がこの十字架から降りてくるなら、私たちはお前をメシヤとして信じてやろう。』

しかし、イエス様はただ言われました。『父よ、彼らをお赦しください。』

彼らは自分が何をしているのか分からないのです。』イエス様は降りることもできました。ええ、間違いなくおできになりました。私は信じています。

あの時、一本一本の茂みの陰に御使いたちが立っていて、「主よ、ただ指をお向けください。この場面を一瞬で変えてみせます」と待っていたに違いありません。

それでも主は沈黙を選ばれました。人々はこう言いました——

『他人は救ったのに、自分は救えないのか!』——ああ、それは実に最高の賛辞だったのです。もし主がご自身を救われたなら、私たちは救われなかったでしょう。主はご自分を犠牲にすることで、私たちを救われたのです。けれども、彼らはその真理を知らなかった。盲人が盲人を導いていたのです——それが今も続く同じ霊なのです。』

43 「よく見てください。この霊がどこから来ているか——サタンからだということを、聖書で証明できます。サタンが荒野でイエス様を試みたとき、こう言いました。『もしあなたが神の子なら、奇跡を行ってみろ。あなたは“神の癒し手”なのだろう？この石をパンに変えてみる。そうしたら信じてやろう。』

——そうでしょうか？これが**その霊の父(源)**なのです。

さらにサタンはイエスを神殿の頂上に連れて行き、こう言いました。

『見ってみろ。ここに聖書が書いてある。“主は御使いたちに命じて、あなたの足が石に打ち当たらないように守られる”と。だから飛び降りてみる。』

地面に着いたら、御使いたちがあなたを支えるはずだ。』

——まるで今日、マルコ16章を持ち出して「そこに書いてあるじゃないか」と言う人たちのように、悪魔は聖書を巧みに引用して誘惑したのです。しかしイエス様は御言葉で応えられました。『主なるあなたの神を試みてはならない。』

そしてさらにこう付け加えられました。『また、こうも書かれている。』

——そうです。主は御言葉をもってサタンに御言葉を返されたのです。

だからこそ、私たちは知るべきです。神には常に“備えの道(God's Provided Way)”があるのです。もちろん、医者のもとへ行くのはあなたの務めです。

自分にできる最善を尽くすこと、それも神の知恵です。けれども——

もし医者がもう手の施しようがないところまで来たなら、あなたには神に呼ばれる権利があるのです。そうです、それは確かなことです。そして——あなたが信じるならば、神は必ずあなたのために道を開かれるのです。』

44 「そして——神は今夜も“備えの道(God's Provided Way)”を用意しておられます。

その道とは何でしょう？それは、ブラナム兄弟でも、リード兄弟でも、

他のどんな牧師でもありません。それはイエス・キリスト、神の御子ご自身です。イエスは1900年前にあなたをすでに癒しておられるのです。

私たちはただ、その事実を指し示しているだけです。リード兄弟のような牧師は、御言葉によってそれを指し示します。また、神が教会に与えられた“聖なる賜物”も、それを指してこう言うのです——『それはイエス・キリストです。』

だから、皆さん、どうかイエス・キリストを信じてください。聖書的に言えば、こう書かれています。——この部屋にいるすべての病める人々は、

すでにキリストによって癒されている。『彼は私たちの咎のために傷つけられ、

その打ち傷によって私たちは癒された。』“癒された(were healed)”——これは過去形です。ですから、あなたが今すべきことはただ一つ。

見上げて信じること。見上げて——生きなさい(Look and live)!

それはペンテコステ派の教会を指しているのでも、バプテスト教会を指しているのでもありません。——ただイエス・キリストを指しているのです。

見上げて、生きなさい!(Look and live!)」

45 「さあ——あなたはいま、カルバリー(十字架)を見上げてください。

そして、信仰によってあなたの癒しを受け取りなさい。

御言葉によって、しるしによって、不思議な御業によって——

どんな方法であれ、もしあなたが信じる事ができるならば、

それは神の主権的な恵みが、御言葉に従う者を導くために現れているのです。

神はしるしと奇跡をもってご自身の言葉を裏づけ、さらに他の人々が信じるようにと働かれるお方なのです。ああ、私は心から願います。

どうか、あなたも信じてください。神の祝福がありますように。

長い間立ったままでお話を聞いてくださって、申し訳ありません。

主があなたを豊かに祝福されますように。——神は“備えの道(God's Provided Way)”を持っておられます。もしあなたがその道を歩む備えができているなら。

あなたは準備ができていますか？本当に、主を信じる備えができていますか？

もしイエス・キリストが昨日も今日も、そしていつまでも変わる事がない方であるなら、主は今日も昨日と同じ御業を行われるのです。そしてこれからも、永遠に。——そう信じますか？それでは、皆さん——内に

いる方も外にいる方も、

どうか今、頭を垂れて祈りましょう。」

46 「天のお父様よ、いまこの集会の終わりに——いえ、大いなる集会が閉じようとするこの時に、私たちはあなたの御前に立っています。

この小さな建物の中に、人々がぎっしりと集まっています。『屍のあるところには、驚が集まる』——飢えた心をもつ人々がここにいます。主よ、どうか彼らを祝福してください。神よ、彼らとともにいてください。リード兄弟とリード姉妹、そしてあの小さな子どもを祝福してください。その子については、彼が生まれる5年前、この地上に現れる前にすでに示された幻を思い出します。どうかその子を守り、祝福してください。そしてこの教会全体を祝福してください。ここには多くのハンカチが置かれています、父よ。それぞれの意図された目的のために、あなたがそれらを祝福して下さいますように。それを身につけるすべての病める人が癒されますように。かつて、パウロの体からハンカチや前掛けが持ち出され、それにより人々が癒されたと聖書にあります。私たちは聖パウロではありませんが、あなたが今もイエスであられることを知っています。癒したのはパウロではなく、彼の内におられたイエスでした。そしてその聖霊は今夜もここにおられます。あの時と同じように——外からの批判も同じ、内からの信仰も同じ。ああ主よ、なんという感謝でしょう！」

47 「そして今、主よ、あなたのしもべが今夜ここに立つにあたり、

どうかあなたの御霊が近くに来てくださいますように。ここにあるこの写真は、**神の御使い——イスラエルの子らを荒野で導いた“火の柱”**の姿を写したものです。イエス・キリスト、すなわち契約の御使い——昨日イスラエルとともにおられ、今日私たちとともにおられ、そして永遠に変わらないお方です。どうか今、私たちとともに祝福してください。あなたの栄光の福音が力強く働きますように。神の御使いがここに臨み、あなたのしもべが油注がれますように。私たちはこのすべてを、多くの人が癒され、救われるために、キリストの御名によって祈ります。アーメン。——さて、クリスチャンの皆さん。今夜私はあちらの部屋で説教を聞きながら座っていた時、ビリーが私に言いました。彼はこの数日間、毎晩祈りのカードを配ってきたそうです。X、W、Q、Y——いろいろな番号のカードを配り、皆さんの多くが今、それを手にしておられると思います。今からそのからいくつかの方を呼び出します。ここ、プラットフォームの前にも少しスペースがあります。今夜、もう少しだけお待ちいただけますか？あまり暑くなく、疲れていなければ——もう少し待てるという方は、手を挙げてみてください。」

48 「では、祈りましょう。さて、よく聞いてください。

もしイエス・キリストが昨日も今日もいつまでも変わる事のないお方であるなら、主は“昨日なされたこと”を、“今日も”、そして“これからも”なさることができるのです。——あなたはそれを信じますね？

主は、あなたの心の中を知ることはおできになります。

しかし、主ご自身が“いまあなたを癒す”ということはなさいません。

なぜなら、神はすでにそれを成し遂げられたからです。——そうでしょうか？すでに完了しているのです。

では……。[ブラナム兄弟、舞台のそばで話しながら]「さて、プレイヤーライン(Prayer Line)はどこから呼び出しましょうかね？ちよっと、どうするのが良いか……。もし、あちらの方から来てもらうなら——そうですね、あのグループの方々に、少し通路を横切って歩いてもらって……。あの部屋の中ももういっぱいですか？うーん……。もし少し後ろに下がってもらえたら、

列を作る間だけでも並んでもらって、それからまた戻れるようにできるかもしれませんね。どう思います？できそうですか？」[周りの者に向かって]

「何と言いました？ここですね？では——そう、このドアのすぐそばのグループの方々から始めましょうか。どうです？」[男性がブラナム兄弟に話しかける]

49 「——そうですね、それがいいかもしれません。

では、人々がこちらに下りて来るための通路を確保しなければなりませんね。

ええ、行きと同じルートを通して、戻ってもらうようにしてもいいでしょう。」

「さて……このあたりにおられる皆さんの中で、  
少しこちらの後ろのほうに立ってくださる方はいらっしゃいますか？  
祈りの列(Prayer Line)を並べるスペースを作りたいのです。  
——ありがとうございます。とてもご親切で、立派なご協力です。」  
「では、あちらの部屋の中におられる方々——  
少し後ろに下がっていただけますか？  
兄弟姉妹、どうかドアのところに押し入らないようにお願いします。  
祈りの列のために、少し場所を空けたいのです。」  
「さて……。ポール、いくつかその番号を(カードの)呼んでくれませんか？  
——(ビリー・ポールが)『V、W、X、Y、Zです』」  
「おお……これはまた!(笑)」  
(※ブラナム兄弟は、少し驚きながらもユーモラスに場を和ませるような口調です。)

..



[www.messagehub.info](http://www.messagehub.info)

説教の語り手

ウィリアム・マリオン・ブラナム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7